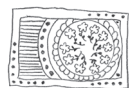


## 夢グループ20周年記念コンサート

(2025・2・20) 熊本市民会館シアーズホーム夢ホール



立春が過ぎてまだ寒さが厳しかった二月二十日、熊本城の近くの熊本市民会館で、「橋幸夫、狩人、チェリッシュ」などが出演したコンサートがありました。

「狩人」のデュオでの公演は最近ではあまりないのですが、「あずさ2号」と「コスモス街道」は私が中学校の新任教師時代のヒット曲であり、その頃のとときめきがよみがえりました。チェリッシュの悦ちゃんの「てんとう虫のサンバ」の歌声は明るく透明感があり、楽しくなりました。橋幸夫の歌は、初めてその声を聞いた小学校時代を思い出させましたし、現在八十一歳とは思えない素晴らしい歌声に圧倒されました。それぞれの歌声の美しさ、年齢を感じさせないパワーに勇気をもらいました。

ステージから目測で二十五メートルほどの距離の座席でしたが、倍率八倍の双眼鏡は歌い手さんの表情や動きがはっきりと見えます。コンサートが終わって出てくると、坪井川の向うに熊本城天守閣がライトアップされており、素晴らしい夜になりました。

(下城公秀)

## 日英合作映画「コットンテール」

(2024年公開)



妻を亡くした六十代の作家(リリー・フランキー)。認知症と別の病とを患う妻(木村多江)を必死に介護した夫だが、それ以前は自分の世界に籠りがちで、息子とも距離があった。妻が生前手紙に綴った願い「イギリスのウインダムニア湖ーピーターラビットや妹のコットンテールが棲む地域にあり、妻は子供の頃に訪れたーに遺灰をまいてほしい」を叶えるため、息子一家と共にその地へ向かう。ドラマチックな展開を予想したが、映画は淡々と進む。説明的な語りは少なく、俳優の表情や挿入される回想の場面から事実関係や背景、心情を想像する。これまで息子に対して壁を作っていた父は、旅の間に変化してゆく。だが、その先の良い関係性が見渡せるほどすっかり晴れ渡って終わるのではない。常に明と暗を抱え、どちらかに染まり切ることはないと、地に足の着いた家族観が読み取れる。一緒に觀賞した九歳の娘も「子供の方がお母さんのこと分かっていると。でもお父さんはダメダメだったけど良い人」と、そんな家族の姿を垣間見たようだ。(田中 泉)